

愛別も故国もはるか

一九九二年—寂聴七〇歳

竹内 紀子

はじめに

一九九二年。瀬戸内寂聴は出家して二〇年目を迎えた。

八七年に寂庵の敷地内にサガノ・サンガを建立して、毎月、写経・座禅・法話をおこなっていた。姉の艶が、出家して無事一〇年過ごすことができた恩返しに、門を開けといつたのである。その姉は、サンガの建立を見ないまま病氣で亡くなってしまった。

岩手県天台寺の住職に就任して六年目。翌年、福井県の敦賀女子短大の学長を依頼され、四年間務めた。京都から移動するだけでも大変であるが、元気な寂聴は旅気分で、気分転換をはかつていたかも知れない。乗り物に乗るとすぐ寝る、という運

転手の話もある。夜中しか書く時間がない、という日頃の睡眠不足を補っていたのかもしれない。

この時期は一遍を描く「花に問え」、湯浅芳子の伝記小説「孤高の人」の連載中で、西行を描いた「白道」は連載を終え、本にするため手を入れていた。

前年の九一年は二月に湾岸戦争の即時停戦を祈願して寂庵で断食をおこなった。泥沼のような湾岸戦争を対岸の火事とはどうしても受け取れず、アメリカの爆撃で殺された子どもや泣き叫ぶ母親がテレビで映し出されると、終戦の一月前、空襲で亡くなつた母と祖父の黒こげの死体が重なつた。北京について寂聴は知らなかつたのだが、引き揚げてきて、黒こげだつたと聞かされると、想像をかきたてられ、見た以上になまなましく目に

浮かんだという。断食七日目に倒れ、翌日入院した。

四月には敗戦国のイラクへ、救済カンパと支援物資を携えて、屈強な編集者二人とともに訪れた。遺書を書いての命がけの旅であった。薬は持つていけど、アンマンで買い、トラックに輸送をまかせていた。

「お金があつても経済封鎖で薬が買えず、みすみす子供を見殺しにするのが情けない」と言つて涙を浮かべていたイラクの医師からも、届いた薬や日本の人々への感謝の手紙が届いた。

七〇歳を迎えた九二年は、念願であった「源氏物語」現代語訳にとりかかつた年。秋には谷崎潤一郎賞を「花に問え」で受賞。そして、七〇という年齢は、寂聴の人生に深くかかわった男性が何人も亡くなつた年であった。

大きな人生の節目となつた一九九二年を振り返りたい。

一 「源氏物語」現代語訳スタート

一三歳で「与謝野源氏」に出会い、世の中にこれほど面白い物語があるのかと感激し、以降「谷崎源氏」を読み、作家になつてからは、同じアパートで「円地源氏」の仕上がる過程をつぶさに見ていた。様々な縁をもつ「源氏物語」を自分の手で訳そ

うと思ったのは、出家してしばらくの間、比叡山のふもとの一軒家で、寂庵が建つまで隠棲していた頃だった。ゆっくり古典を読み返す時間があつた。

そのとき「源氏物語」の主要な女たちが次々に出家することに気がつく。今まででは誰が出家しようと、気にならなかつたのに、いざ自分が出家すると、そこにいちばん目を引かれたのだろう。光源氏との恋と苦悩の果てに出家があり、女たちが出家すると光源氏を見下すように心の丈が高くなるのを感じた。そして「源氏物語」は「出家物語」ではないかと考える。自分が出家して初めて気づいたことである。また、宇治十帖では、出家する式の過程が詳しく描写され、それは自らの出家の様式と何ら変わることろがなかつた。千年も続いているのだ。そして、作者の紫式部も自ら出家し、そののちに宇治十帖を書いたのではないかと考えた。

登場人物の女たちが口を開いたら、という発想のもと、「女人源氏物語」（一九八四年二月～八九年三月「本の窓」）を連載する。寂聴が「源氏物語」を読み、それぞれの女たちが感じたこと、考えたことを想像し尽くし、より陰影深く人物を描いている小説といえよう。読売新聞には随筆「わたしの源氏物語」（一九八七年一月～八八年一二月）を連載する。現代語訳の準

備はととのつたかに見える。

その前に、どうしても書いておきたい出家者三人がいた。一

遍、良寛、西行である。書くことで、在家であつた三人が、な

ぜ突然出家したのかがわかるのではないかと思つた。自らの出

家の理由が、はつきりとはわからなかつたからである。よく寂

聴は首根っこを何かにつかまれて出家させられたということを

書いている。この三人を描く「花に問え」「手毬」「白道」はよ

く似た時期に連載し、一〇カ月間は三作の連載が重なつてゐる。

そんな離れ業ができる集中力が寂聴にはある。六八歳のときで

ある。この時期は「紅河」という釈迦の評伝も「フエミナ」（学

研）という季刊雑誌に連載していた。

そして七〇歳を迎える、「源氏物語」現代語訳を出版社に持ち

こむ。自分からこんな大きな企画を持ちこむのは初めてだつた

といふ。すでに現代語訳を出版している社は避け、自分とつき

あいのある社に投げかけた。すると役員会で「あなた、命がも

ちますか」と言われた。「源氏」の訳が、どれほど大変かとい

うことを知悉して出た言葉であろう。いちばん最近の円地

文子は六一歳から始めた。途中、両目とも網膜剥離の手術をし

てゐる。もちろん寂聴も傍で見ている。すぐにはOKが出ず、

数日経つて、最後に女性の役員が「私が責任を持ちます」と言つ

てくれて、四月の末、社内で決定したといふ。

寂聴は寂庵から歩いて一時間の場所にマンションを構え、そ

こにこもつて書き始めた。

「源氏」を完成させるための覚え書きノートには六項目が書

かれている。

1 健康 サンボ ヨガ 気功

2 規則正しく 仕事時間決める 休みとる（土・日） テツ

夜しない

3 仕事の整理 引き受けない

4 義理をかく 誰が死んでも

5 経済をひきしめる 慎ましい生活

6 最後の仕事と思う

よく「七〇歳から本当の仕事ができる」と語つてゐた。「最

後の仕事」と、自らの集大成と思い、取り組むせいか。損得で

なく、いちばん価値のある、したい仕事をするという意味か。

それにふさわしい判断力、総合力が發揮できる年齢ということ

か。日本の文化のために、という後世のことを考えた仕事とい

う意味だろうか。

これ以降、六年近くかけて、全一〇巻が完結し、その普及のため日本だけでなく、海外にまでも赴き、「源氏物語」ブーム

を巻き起こした。

二 男たちの死

「寂庵だより」（一九九二年七月一日）に掲載した随筆「点鬼簿」に、亡くなった男たちのことを書いている。

涼太（作品中の名前）

「去年、一月二十七日私が家を出る原因になつた男が死んだ。別れてから二十数年も経つていたが、死は人が伝えてきた。肺癌の再発と事業の失敗が原因らしい縊死であつた。六十六歳に後一ヶ月という時であつた。」

「夏の終り」の連作に涼太の名前で登場する四歳下の男性である。夫が北京に留学する前に徳島の学校で漢文を教えた生徒で、上海の学校に進み、北京にも二度訪ねてきたことがある。北京で敗戦を迎える、引き揚げてきた徳島で再会し、寂聴に太宰や安吾など戦後の新しい文学をもたらした文学青年でもあつた。ともに夫に命令され、国会議員の選挙運動を手伝うしなかに寂聴が初めて恋を告白した相手であつた。若かつた二人の恋は成就せず、寂聴は離婚し、涼太はやがて別の女性と結婚した。

十年近くたつて、東京で「文學者」の先輩作家であつた小田仁二郎と半同棲の生活をしている寂聴のもとに「尾羽打ち枯らした」姿で現れ、寂聴が「一人の男の間で揺れる姿が「夏の終り」に描かれた。この作品で女流文学賞を受賞し、寂聴は作家としての地位を確立する。結果的に、寂聴が作家になるきっかけを与えた男である。

元夫

「今年閏の二月二十八日、別れた夫が死亡した。（中略）会議中脳内出血をおこし、病院へ運ばれる車の中で意識を失つたといふ。病院の名前と医師の名前をはつきり指示したのが最後の言葉だつたとか。私との別離後、熱心なクリスチヤンになつていて、盛大な教会葬が営まれたと聞いた。七十八歳だつた。」

寂聴が二十歳、相手が二十九歳のとき、徳島で見合結婚した。外務省の留学生として北京に渡り、中国古代音楽史を研究していた。結婚時は師範大学の講師を務め、ひつきりなしに友人が自宅に訪れる社交的な性格であつた。翌年、女児が生まれ、輔仁大学、北京大学と職場を移り、戦争末期には三ヶ月ほど招集されていた。敗戦を迎える、中国に骨を埋めたいと一年間潜伏したが、日本に引き揚げた。以降は東京の国家機関で仕事をし、

定年後は北陸の大学に通い、現役中の死であった。

井上光晴

「それから二ヵ月後、五月三十日、二十数年来の最も親密だつた友人の井上光晴さんが逝去した。三年間の癌との凄惨な闘病の涯の痛恨の死であつた。」

井上との出会いは一九六六年四月。高松市での講演に東京から一緒に旅立つたのである。四歳下であらゆる点で畏敬し、相談をもちかけていた。出家前までは恋の相手でもあつた。友情は続き、この年の五月にも度々上京し、見舞つてもいた。

「井上さんの病中の三年間、私は友人として出来る限りのことはしたと思っていた。しかし現実に死なれてみると、してあげ足りなかつた悔いばかりが日を追つて無限に湧き上つてきて辛い。」と書いている。

六月八日、告別式。寂聴は弔辞を読んだ。原稿用紙一五枚に、書き上げたという。一部を抜粋する。

私は小田仁二郎によつて文学の開眼をさせられ、あなたによつて文学の軌道修正をつづけさせられました。抵抗することはあつても結局はあなたの批判の正しさに屈服して

私は文学的頽廃からまぬがれ得たと思います。

実際に多くのことをあなたから教えられました。文学の真贋の見分け方、世界の状勢の解説のしかた、不幸な人への対応の心等々、数え上げればきりもありません。（中略）

けれども徒順なばかりでなかつた私は、あなたと実際によくけんかをしました。自分が批判される二倍くらいはあなたを批判しかえし、やつつけました。違うことの少い私たちは、毎日のように電話でけんかしました。電話機がこわれそうな大声で互いに闘いました。

本気でけんか出来るのは対等の立場と活力があるからです。あなたが病氣して以来の三年間は、もうけんかができなくなりました。いつでもあなたをいたわらなければならぬ状態でどうして本音のけんかができるでしょう。医者はあなたが生きていることが奇蹟だと私に囁きつづけていたのです。

（「すばる」一九九二年八月号）

寂聴は井上の告別式から一〇日余りしてイタリアへ旅立つ。トスカーナ地方に住んでいる親交のある画家、堀文子さんから、誘われていた。アトリエのあるアレツツオは、夜は螢が満天の星をばらまいたように光るという。六月二日に石畳の道に花

びらを置いてじゅうたんにするという花祭りがあり、今年はその下絵を描いたので見てほしいという。花で絵を描くのは前夜の夜中だから一九日に成田を発つよういわれたのだ。

たくさんのグループが一年間考えてきた構図と、ためこんだ花を使って路上に絵を描く。花は生花も乾いた花もある。一晩かかって仕上げ、翌朝は石畳に敷き詰められた豪華な花のカーペットを見物する。日頃は三千人の人口のスペッロの街に数万人の人々が見物に来るという。教会の鐘が鳴り響くと、老司祭が樂隊と聖歌隊の少年たちを連れて教会から出てこられ、軽やかに花のカーペットの上を歩く。花びらは少しも乱れていない。司祭の行列が通り過ぎ、一時間もすると花のカーペットは掃きすてられる。

「まるで夢の中で夢を見ていたような、不思議なスペッロの一夜であった。」(『The Gold』一九九三年五月号)と寂聴は書いている。

また、この旅に発つ前の伊丹発成田行きのジャンボ機で、席に着いた途端、井上に似た男を見る。そして井上とのつきあいを追想する。

「幻日」は一九九三年一月号の「新潮」に発表された、井上の死の前後を描いた短編小説である。

深夜、弱々しい声で電話がかかる。

「もう死ぬよ、おれは」

「何いつてるの、絶対死なないつて、つっここの間もいつたじゃないですか、あんなに切りきざまれてもたちまち快復するなんだもの、生命力が異常なよ大丈夫」

「もう絶望だ。死ぬ人間だと心で思って、表面は出来るだけのん気にふるまつてくれないか」

「抑揚のない声が、もう他界からの声のようになんかししく聞えてくる。」

「すぐ行きます。朝いちばんで発つわ。明日十時には病院へつくと思う」

「長くいるつもりで来てくれ、今度は」

通夜に行つた時、信じられないほど美しい氣品の高い死顔を見た。そして話しかける。

「きれいな死顔ですよ、羨ましくらい。あなたも心の根がやさしかつた……かくしてごめんなさい。私、間もなくトスカーナに行きます。蟹になつて向うでも光つて下さいね、トスカーナで逢いましょう」

イタリアのアレツツオで堀文子さんと、雨上がりの湿った夜

氣の中で無数の明滅する螢を見る。日本の螢よりそれは小さく、チカチカと光るまばたきのようないい明滅の度合いがはるかに速い。

嵯峨の奥の清滝で毎夏見る源氏螢の、優しいため息のよな光り方をする群れをも思い出す。（中略）地平の果てまで広がつた畠の闇の中に、空氣の呼吸のようにびつしりと螢が明滅していた。黒ビロードのカーテンに縫いつけられたダイヤのようでもあり、天のおびただしい星が地に落ちてきたとも見える光景だった。もう二度とは逢えない光景だと、私は息を止めて、この世のものとあの世のものとも見極め難いおびただしい光の乱舞に身をゆだねきつていた。（「The Gold」九三三六年六月号）

この瞬間、寂聴は井上の魂がトスカーナに来て、螢になつて自分を取り巻き、光つていると実感したことだろう。寂聴はこの螢の光に包まれて、井上をひとり送りたかったのだろう。それから二九年が経つた。寂聴は逝去し、親しかつた編集者

が集まり、寂聴を語った。このイタリアの旅に同行した小学館の元編集者、佐山辰夫氏は次のように語っている。

『あきらめない人生』のエッセイが完結した記念に、イタリアへご一緒したんです。そうしたら旅先で、「愛別も故国もはるか夏の蝶」と即興で詠されました。蝶々が飛んでたんですが、それにご自分を託されたのですよ。

（座谈会「瀬戸内番」編集者が見た素顔」より）『文藝別冊 増補新版 瀬戸内寂聴 愛と文学に生きた99年』

二〇二三年七月発行

今堀先生

「またひとり、大切な人が他界された。十月九日、広島からその報を受けた時、かねてその日の来ることは覚悟していたものの、やはり強い衝撃を受けて果然となつた」（「また、惜しい人が」「寂庵だより」一九九二年一一月号）

今堀誠二氏は北京時代の知り合いで、夫と同じ外務省留学生で、同じマンションに住んでいたが、留学期間が終わると広島の大学に帰り、夫は北京に残つたのだった。そこへ蒙古の調査旅行の帰りに立ち寄つてくれて寂聴と顔を合わせ、新婚の寂聴

に、結婚しても自分の可能性は磨き、伸ばさなければいけないといい、小説を書くことをすすめた。

東洋史専攻の学者であるが、半生を原水爆禁止や平和運動に捧げ、「谷本清平和賞」を受賞し、「平和運動は忍耐。忍耐を積み重ねる中で、必ず平和は勝利を得る」とメッセージを残している。

寂聴が離婚した後、寂聴の側に立ち、味方をしてくれたといふ。終生、交友は続き、「私に反権力や人権を守ることや、平和への志向があるのは、すべて今堀先生の思想の影響である。私のバックボーンをつくってくださったのは今堀先生であつた。かけがえのない恩人を、またしても今年、失つてしまつた。」(同)と書いている。

畏敬し、何かあれば相談したい、本音で話せる男性が亡くなつてしまつた。どれほど心細く、頼りない気持になつたことだろう。

井上とは四〇歳代での出会いであつたが、他の三人は二〇歳代で出会い、運命的で長い交友があつた。自分を知つていていが、すべていなくなつたといつても過言ではない。

この年、日本経済新聞に連載していた「私の履歴書」には、「私が最後に残されることも、彼等の冥福を祈るために与えられた

余命なのであろうと思う。」(五月三一日)と書いている。

三 谷崎潤一郎賞受賞

寂聴は「夏の終り」で一九六三年四月、第二回女流文学賞を受賞して以降、久しく文学賞に恵まれていなかつた。一遍を描いた『花に問え』で谷崎賞受賞の知らせを受けたのは、ポルトガルの首都里斯ボンであつた。徳島で亡くなつたモラエス(一八五四～一九二九)の取材のため、彼の故郷である里斯ボンへ飛行機で到着したとたん、先に着いていたテレビ局のスタッフが「おめでとう」と言つて迎えてくれたのだつた。

私はペン一本で生計をたてはじめ、四十年になる。三つ 文学賞をもらつたが、最後の女流文学賞をもらつて以来、すでに三十年が過ぎてゐるのだ。その間、私は一日として書かなかつた日とてはないといつても過言ではなかつた。受賞してもいいと自負する作品も五つや六つは書いている。それなのにたゞの一度も受賞したことがなかつたのだ。ある時から、もう私は賞を見放してしまい、全く考へないよう自分を馴らししつけて書いてきた。

私を支えてくれたものは無数の読者と編集者だった。そ

んな私に、今頃、どういう風の吹き回しか、いちばんほしかった谷崎賞が転がりこんだのだ。実に三十年めに、しかも七十歳になつて。

ホテルについてファックスを目で確かめ、夢でないとわかつてから、スタッフに祝つてもらって乾杯した。中秋の満月がリスボンの空に皎々と光り輝いていた。

（「モラエスと谷崎賞」一九九二年十月六日 徳島新聞）

あんまり思いがけなくて、私はその夜ホテルの窓から満月を見上げつづけて感無量だつた。この三年間にたてつづけに他界して往つた私の人生に深い関わりのあつた男たちの俳が、月の面に顕れては消えていった。思えば「花に問え」は、彼等への鎮魂として捧げられたものであつたかといふ感懷も湧き、もしかしたら、今度の賞は彼等からの私への贈り物なのかもしれないという気もした。

私の好きなデュラスは七十歳の時、「ラマン」でゴンゴール賞を受賞している。七十歳の受賞もなかなか乙なものではないかと、ようやくひとり笑う余裕が生れていた。

（『私解説』新潮社刊）

第一八回谷崎潤一郎賞（中央公論社主催）の選考会は九月一日夕刻に行われ、「花に問え」に決定した。授賞式は一〇月一六日午後五時から東京・丸の内の東京会館で行われることになった。選考委員は井上ひさし、ドナルド・キーン、河野多恵子、中村真一郎、丸谷才一、吉行淳之介の六人である。

寂聴は一九七〇年度に「蘭を焼く」で谷崎賞の候補に上がつていたが、そのときは埴谷雄高「闇のなかの黒い馬」と吉行淳之介「暗室」が受賞している。

「花に問え」は現代に生きる人間の目から一遍をとらえた作品である。徳島の県南を流れる川にかかる橋で出会つた若い遍路とその恋人、修復師をめぐる旅館の女将とその娘。それぞれの生と、一遍を愛慕し続け、過酷な旅をともに歩いた超一、超二の可憐な母娘の生を交互に描く。出家以前から、寂聴にとって一遍は強い憧れを抱いていた僧であり、『一遍聖絵』は寂聴の眼底に焼きつき、「おのずからあひあふときもわかれても、ひとりはいつもひとりなりけり」という一遍の歌は護符であつたといふ。

選考委員の丸谷才一は、「この小説は……むしろ工夫と才覚に富む。その第一は、一遍上人伝説と現代とを重ね合わせる神

話的方法である。これによつて末世の凡愚のすつたもんだは人類永遠の課題として莊厳化され、遙かな昔の名僧伝は今日只今の事件としての切実さをもつて迫ることになる。(中略)第二は、登場人物がみな中心人物であるような方法である。チエーホフの戯曲を思はせるこの書き方は、二十世紀小説の一特色なのだが、瀬戸内さんはこれを攝取して、充分にこなれた形で見せてくれた」と評している。

これ以降、ゆかりのある岩手や京都、徳島からの文化賞や功劳賞を受賞し、九六年には『白道』で第四六回芸術選奨文部大臣賞、九七年には文化功労者に選ばれる。二〇〇一年には『場所』で第五四回野間文芸賞、〇六年には文化勲章を受章する。時代がやつと寂聴に追いついたともいえよう。それ以降も〇八年安吾賞、一一年『風景』で泉鏡花文学賞、一八年、九五歳で朝日賞、句集『ひとり』で星野立子賞、九七歳で桂信子賞と受賞が続く。いちばん欲しかったときには届かず、晩年になつて、予想外の賞にも恵まれたといえよう。

おわりに

寂聴が賞に恵まれず、「それまでにもらつてもいいと思う作

品を五つや六つ書いている」といつているが、それがどの作品なのかは想像がつく。時代に合わなかつたとしかいよいがらい。もちろん推してくれる選考委員はいたにしても、大勢を占めなかつたということだろう。

賞は時代の華なのかも知れない。受賞者がいつまでも残るとはいえないが、作家にとつては、認められた証しであり、以後の肩書きになる。そこで一段落もできただろう。

寂聴にはそれがなく、三十年近く走り続け、力を蓄え続けたのかも知れない。他人の評価よりも、自分の評価をまず念頭においたのだろう。

この七〇歳という節目、これまでの文業に評価が与えられ、目の前には畢竟の大仕事「源氏物語」現代語訳があつた。自らの分身であつたかのような男たちは魂となり、見守つてくれるのみ。「ひとり」をつきつけられつつも、頭は冴え返り、書きたいものを書きたいように作品にしていったのだろう。より大きな唯一の「仮」という相談相手を得、夜になると星や月に語りかけていたようである。